

以上のことから、この活動は「書くこと」の力が  
つく楽しい活動として、概ね生徒に好感を持って受  
け入れられていると言える。

### 3 授業者の声から

授業を担当した高木靖教諭は、次のように感想を  
まとめている。

『本校生徒が英語の授業に期待することの中で最  
も多かったのが、「自分の考えを自由に話したり、  
書いたりできるようになりたい」ということであっ  
た。それを受けて、授業にディベート活動の手法を  
取り入れたり、世界中の国々を紹介する自由作文を  
作らせたりと、表現力を高める活動を以前より頻繁  
に設定して、その能力向上に努めてきたつもりであ  
る。しかし、反省として各活動が単発で系統的とは  
言えなかったことや、下位の生徒には難しすぎたこ  
となどが挙げられた。その点で、このレスポンス・  
ライティングは、定期的な実践とタイムリーな話題  
の提供により、ほとんどの生徒が「書くこと」に対  
して抵抗感なく取り組めるようになったこと、回を  
重ねるにつれて書く量が増えてきたことなどが大き  
な成果となって表れた。

また、上位の生徒はそれまで2文で表現していた  
内容を関係代名詞や後置修飾を用いて1文で表現し  
たり、未習の連語を使ったりするなど、より高度な  
表現に挑戦しようとする姿勢も見られるようになった。  
下位の生徒にとっても、全く何も書けないで終  
わってしまうという姿は見られなくなった。ただ、  
書こうとする内容をうまく表現できないもどかしさ  
や、何度やっても相変わらず英文の中に日本語を用  
いている自分への腹立たしさなどから、この活動に  
消極的になっている生徒も出てきた。

そのため、今後の課題として、語い力や基本文型  
の定着など、基礎・基本との関連を十分に考慮する  
とともに、生徒作文への援助の手だてや評価の仕方  
にさらに改善を加えていきたいと思う。』

## V まとめ

### 1 研究の成果

この研究を通して、次のことが成果として確認で  
きた。

(1) 自分の思っていることや考えていることを自由  
に書くことは authenticity が高く、書き甲斐があ  
るため、生徒の書こうとする意欲が高まった。継続  
してこの活動に取り組むことで、まとまった量の文  
章が書けるようになった。

(2) この活動においては、「書くこと」の領域が単  
独で扱われるのではなく、教師の話を「聞いて」書  
くため、多量のインプットをすることができる。ま  
た、書いた内容について「話す」など、活動を発展  
させることができる。このように、他の領域と組み  
合わせた統合的 (integrated) 活動が行いやすいの  
でコミュニケーション能力を育てるのに適した手法  
と言える。

(3) ○か×か的な評価が中心となる和文英訳と違っ  
て、RWのようにコミュニケーションで authentic な  
活動では生徒の誤りの発生率は高い。しかし、その  
誤りはふだんの教師の指導の鏡であり、次の指導の  
手がかりの貴重な宝庫となった。

### 2 今後の課題

今後この活動を続けるに当たって、次のようなこ  
とが課題として挙げられる。

(1) 授業への位置づけ

① 時間設定

授業の最初にウォーミングアップを兼ねて行うこ  
とも考えられるが、各レッスンや学期のまとめの活  
動として、1単位時間をフルに活用して取り組ませ  
るといったバリエーションも考えられる。授業の目  
標に照らし合わせて、計画的・継続的に実施してい  
くような位置づけが必要である。

② ターゲットセンテンスとの関連

各レッスンの中から1つのターゲットセンテンス  
を選び出し、そこで使われている文型や文法事項な  
どを、キーセンテンスに盛り込んで生徒に提示する  
ことも考えられる。そうすることで日常指導する言  
語材料との関連がより深まり、効果も期待できる。